

## アイヌ英雄叙事詩におけるカムイという語の一用法

遠藤 志保

## 1. はじめに——問題の所在

アイヌ語の「カムイ」は通常「神」と訳される語だが、アイヌ英雄叙事詩においては、カムイラメトク「立派な勇者」、カムイコンソテ「立派な小袖」のように訳されることもある。この場合は神とは直接関係なく、立派であることを表す修飾語としての用法である。このように「カムイ」という語であらわされる範囲は「神」だけでは収まらない。

そのなかで、鍋沢元蔵氏による英雄叙事詩テキストにおいては、敵対者などの勇者が物語の途中で登場する際（以下「登場場面」と呼ぶ）においては、カムイエクフム（複数形・カムイアラキフム）「神が来る音」を立てつつ空を飛んで来ると語られる。やがて、その人物はアイヌテレケフム「人間が跳び下りる音」を立てて、主人公のいる場所の近くに降りる。たとえば、主人公の弟（敵対者）が登場する際に、

ネラボキ

そのとき

パセカムイ

重き神の

エクフムコンナ

来る音が

コトゥリミムセ

ごうごうと鳴り

(中略)

チケトイカウン

掃き出した地面の上に

アイヌテレケフム

人の跳ねた音が

コリムコサヌノ

チャリンと鳴り

『喰べ気違い』二四六—二五九行<sup>①</sup>

と語られる。鍋沢氏のテキストでは、登場場面における「カムイ」「アイヌ」という語の使い分けはほぼ徹底している。これは敵味方あるいは男女を問わず、共通した使い方である。

本論文では、登場場面において、同一人物による一連の動作の流れであるにもかかわらず「カムイ」「アイヌ」という語がそれぞれ使い分けられている理由、特に人間であるはずの登場人物に対して「カムイ」という語が使われる理由を、アイヌ英雄

叙事詩における「カムイ」という語<sup>3</sup>の意味範囲や使われ方について分析することによって考察する。

## 2. 使用テキスト

沙流川下流域にあたる沙流郡門別町（現・日高町）富川に住んでいた鍋沢元蔵（モトアンレク）氏（二八八六―一九六七）の筆録による英雄叙事詩（ユカラ）を用いる。

具体的には、門別町郷土史研究会（一九六五）所収「クトゥネシリカ」、同（一九六九）所収の「鷲鎧」「ニタイパカイエ（四〇年版）」「水なしに育つ、火なしに育つ」「余市姫」「トリカブト姫」「魔竜退治」「犬育て、悪者育て」「喰べ気違い」、国立民族学博物館所蔵鍋沢元蔵筆録ノートに所収の「ニタイパカイエ（二九年版）」「ポイソヤウンマツ」「三兄弟」<sup>4</sup>の計二二篇（一一種）である。

## 3. 日常生活における神と英雄叙事詩における神

神（カムイ）は、アイヌの世界観における重要な観念のひとつである。本稿ではその全体像を詳細に論じることはできないが、神（カムイ）とはどのようなものか、概観しておく。

まず取り上げるのは、英雄叙事詩における神ではなく、アイヌの世界観における神である。すなわち、日常生活において信

仰の対象となり、祈詞を捧げられる存在である。この他、日常生活の世界観が語られる散文説話や神謡といった口承文学ジャンルに登場する神も含む。こうした神についての記述をまとめると、次のような特徴があげられる。

① アイヌの神の概要としては、次のような説明がある。

「クマヤキツネ、カツラヤトリカブトなどの動植物をはじめ、火や水、山や川、流行病などの自然現象から、舟、家、白など人間の手になる人工物にいたるまで、この世で何らかの役割を果たしていると思われる人間以外のすべて……を人間と同じような精神をもった存在としてとらえ、それをカムイと呼んでいる」<sup>5</sup>「大島他 二〇〇一 三五六」

「アイヌの『神』というのは何であるかというのに、それは「人」に対立する存在で、それは、目に見ることの出来ない霊を呼ぶ名であって、目には見えないけれども、人力を以てして、普通では、如何ともしがたい能力を持っている」<sup>6</sup>「金田一 一九九三c 八七」

動植物、器物を含めたすべてのものには「霊」（ラマツ）があるが、「霊に強と弱があるので、結局人間は中くらいの位置にあって、それ以上は全部神になります。靈魂の能力として強のものは神さまになれるわけです」<sup>7</sup>「藤村、一九八二 九〇―九一」

「神さまというのは最終的には人間の及ばない力をもってい

るものすべてということになります」〔同 九五〕

すなわち、人間「アイヌ」以外の存在にもすべて、魂・精神があり、それら——特に人間よりも力が強いもの——が神「カムイ」だという説明である。また、これは一頭一頭の動物、ひとつひとつの器物がそれぞれ神ということであって、火であれば火全体を統括したり授けたりする神がいるわけではなく、ひとつひとつの火そのものが神である。

さらに、神のなかには「ベリカ」(善い・美しい)であるか、(ウエン) (悪い・敵意のある)であるか、またいたずらはするが必ずしも意地悪くはない(コシネ) (軽い・位の低い) 神であるか「マンロー 二〇〇二 一七」といった分類があると言われているように、人間にとつてネガティブな存在であっても、それは一樣に神「カムイ」である。人間にとつてプラスの存在であるかマイナスの存在であるかは神であるか否かに関係ない。

② 神の住む場所ならびに姿については、以下のように記述される。

「おのおののカムイは本来カムイモシリ〔カムイの世界〕と呼ばれる所に暮らしているとされる。……カムイモシリにおいてカムイは人間と同じ姿をしており、人間と同じように縫い物や彫り物をしたり、料理を作って食べたりして暮らしていると考えられている。ただしそれは靈魂での姿であり、人

間の目には見えない。……人間界に姿を表すためには、人間の目に見えるような衣装を身につける必要がある。クマであれば黒い着物であり、火のカムイであれば赤い着物であって、それがわれわれの目に映るあのクマの姿であり、炎であるということになる」〔大島他 二〇〇一 三五六〕

③ 祈りの対象となる「祭祀神は自然力を神格化した神様」であり、火の女神(カムイフチ)、樹木の神(シランバカムイ)、水の神(ワツカウシカムイ)、狩猟の神(ハシナウカムイ)、家の神(チセコロカムイ)、村の守り神(コタンコロカムイ)などが祀られることが多い。〔金田一 一九九三c 一〇三〕

また、久保寺(一九七七)に収められている神謡を見ると、クマ、ウサギ、キツネ、カジキマゲロ、シャチといった陸海の動物から、カケス、カッコウなどの鳥、ホタル、セミ、ヘビ、カエルなどの虫・小動物、舟、家の神といった器物、火の神、水の神、木の神、雷神といった自然神など、人間の身の回りに存在する様々なものが、物語中では自叙神として登場することがわかる。

以上が、日常生活や散文説話・神謡における神の概要である。だが、英雄叙事詩では日常生活とはかけ離れた超人たちによる戦いの世界が描かれることもあって、以上のような神の特徴が英雄叙事詩に登場する神にもすべて当てはまるわけではない。

①の神（カムイ）の基本的な捉え方について、英雄叙事詩における神についての先行研究は多くなく、一概に比較することは難しい。だが、本稿で以下論じるように、「カムイ」という語が人間以上であることを指すことや、主人公にとってプラスの存在（援助者）も、マイナスの存在（敵対者）も登場することから、人間（アイヌ）以外の存在のうち、特に人間よりも力が強いモノが善悪を問わず神だという点では、日常生活における神も、英雄叙事詩における神も、同じだと言えそうである。

②のように、日常生活における神は、人間のような姿で神の世界（カムイモシリ）に住むが、人間の世界（アイヌモシリ）では、夢のなかに出てくる場合など除いて、動植物や器物などの形である。それは、衣装（ハヨクペ）を着ているために、そう見えるのだとされる。

一方、英雄叙事詩に登場する神も基本的には神の世界にいる。そして人間の前に現れる際、夢の中など特殊な場合以外では人間の姿では現れない散文説話などと異なり、人間の姿として現れることが多い。なかには、特に戦闘場面において、竜のような姿として登場することもあるが、それは鎧（ハヨクペ）を着ているからであり、その鎧を壊すと中から、神の本当の姿であるところの美少年が出てくると語られる。したがって神の本体（本性）は人間の姿であり、衣装・鎧を着ると動物などの姿に見えるという基本的な観念は英雄叙事詩の世界観においても一致しているが、人間の前に立つときの神の現れ方といった、物語

における描かれ方は英雄叙事詩に特有である。

③に挙げたような、人間生活と深く関係して祈りの対象となったり、散文説話や神謡に多く登場したりする動植物や器物の神、自然神などは、英雄叙事詩にはほとんど登場しない。英雄叙事詩で、最も多く登場する神は憑き神であり、この他に戦いの神（トゥムンチカムイ）や敵の村を守る神なども登場する。むしろこういった神は散文説話や神謡に登場することは少ない。すべてのジャンルに共通して現れるのは、雷神（カンナカムイ）や巨鳥フリなど、ごくわずかである。オオカミ神も登場するが、英雄叙事詩においては天の国に住む人間の姿や刀の鞘に宿る神として語られ、散文説話に登場するような動物としてではない。同様に雷神も、神謡では雷を落とすなどするが、英雄叙事詩では、戦闘場面において鎧を着ることによって「竜」のような姿になる以外に、雷そのものを反映する様子は描かれない。

日常生活や神謡・散文説話においては、神にはそれぞれの独自の役目があるとされ、人間もそれに合った対応をする。たとえば、火の神は神へ人間の言葉を伝えてくれる重要な存在であるため祈詞はまず火の神に対して行い、クマの神は毛皮と肉という土産をもって人間界を訪れるので人間はお返しに酒やイナウなどを持たせて神の国に帰す。

しかし、英雄叙事詩において、神は人間以上の力を持つ存在であるとしても、主人公に味方をする（援助者）か敵対者として振る舞うかのいずれかであることが多く、個々の神の特性や、

人間との特定の関係性などは語られない。

#### 4. アイヌ英雄叙事詩における登場人物としての神と人間

次に、鍋沢氏の英雄叙事詩における主な神と人間とを整理する。

まず、登場人物として現れる神を挙げる。ここでは名称として「カムイ」がつくものを神として扱う。英雄叙事詩において、ストーリーに直接かかわってくる神もいるが、直接かかわってこない場合もある。前者の場合、神の機能（役割）は、敵対者か援助者、あるいは主人公の妻のいずれかである。たとえば、敵対者としては「鷲鎧」におけるニシポク村の守り神夫婦がいる。神とはいえ、神自身が主人公と直接刃を交えて戦う。この場合の戦いは、人間の場合とほぼ同じである。

敵対者のほか、援助者としての役割を果たすことも少なくない。たとえば「ニタイパカイエ」における地下の世界の魔神が、主人公に鎧を貸し与えるように、多くは呪具の贈与という形で主人公を助ける。

主人公の妻になる神としては、「ニタイパカイエ」で主人公のもとにアエオイナカムイ（アイヌラツクル）の妹が嫁に来る例がある。

次に、ストーリーに直接かかわってこない神としては、憑き

神（トゥレンカムイ）や、虎杖丸という宝刀に憑く神のように、主人公の力の源となる神がいる。憑き神はその姿や正体については詳しく語られないものの、ほぼすべての英雄叙事詩に登場し、突風を巻き起こしては敵の村人を空中に巻き上げるなどする。同じように主人公に力を貸す神としては、味方の復活や戦いへの加勢を祈る対象としての神がいる。だが、登場しない話も多く、またその具体的な姿形のみならず力を發揮する場面自体が語られない。さらに味方が無事に復活を果たしてもそれに対する感謝の祈りなどは語られないこともあり、全体的に神の力によることは強調されない。この他、主人公たちの戦いを観戦しに来る神々もいるが、この神々は各々の名称も紹介されない群衆として扱われている。

また、「カムイ」と名のつくものとしては、樹木（シリコロカムイ）や酒（トノトカムイ）、寝台の下や天井にいる神などのように、器物・物体そのものが「カムイ」という名称で呼ばれることもある。しかし、ここで「カムイ」という語が使われているのは、一行を四ないし五音節に揃えるという韻文の規則に合わせるため、すなわち、音節数を整えるためという側面が強い。そのためあっても、器物を神として丁寧に扱っている描写は見られない。

「カムイ」とは呼ばれない登場人物としては、超人的な勇者と、ごく普通の村人たちがいるが、ともに人間の国（アイヌモシリ）に住む人間として扱われている。主人公やその味方ある

いは敵は、ウンクル、ウンマツという名称で指示される勇者たちである。彼らは、空を飛んで移動したり、回復力が人並み外れていたり、巫術を使ったりするが、英雄叙事詩の世界では、主人公がアイヌアクポ「人間の弟」と呼ばれるように、すべて人間である<sup>(7)</sup>。

なかには半人半神と明記される登場人物もいるが、鍋沢氏のテキストにおいては、「犬育て」におけるリクンチウンクルがアラケ カムイ／アラケ アイヌ「半ば神／半ば人」と呼ばれる「犬育て」一六一―一六二行目のみである。ただし、「半人半神」であるがゆえの特徴は物語中では特に語られないことから、実際に半神半人であるというよりも、そう思えるほど素晴らしきという誇張も含めた褒め言葉である可能性も高い。

以上のように、それぞれの登場人物が、神か人間かは、明確に分けられている。そのため、登場場面において「カムイ」「アイヌ」が同一人物に対して共に使われているのは、その人物が人間であると同時に神であるという理由によるものではない。

## 5. 「カムイ」という語の使い方

人間に対して「アイヌ」という語が使われるのは当然だとし、なぜ「カムイ」が使われるのか。それを見ていくために、「カムイ」という語が英雄叙事詩においてはどのように使われているかを概観する。

### 5. 1. 先行文献における説明

英雄叙事詩における「カムイ」という語の意味について、テキストの注釈を見ていくと、主に、①容貌などが素晴らしい様子を「神のごとき」とたとえて言う場合と、②「立派な」という意味ではあるが、神であることを含有しないという説明が見られる。

①のように「神の如き」意味だとする説明としては、カムイ オトピ「神の髪」を「Kamuiはこの男を云ったので、神の如きこの勇士の毛髪をであろう」[金田一、一九九三a 三三三]、エネアンカムイ「このような神」を「これだけの容子のよい男での意。見たところ神さま見たような立派な男」[同 三八四]、カムイカツチャシ「神の造った城」を「人間の造ったものではないに、神の造った城の義」[同 五〇四]といった説明がある。

②のように神に言及せず「立派な」という意味だと説明している場合としては、たとえば、カムイヌベキ「神の光」を「善美のたたえことば、美しき光、立派な光の意」[金田一、一九九三b 四三二]、カムイチャシ「神の山城」を「この、のKamuiは形容語、善美なるの意」[金成・金田一、一九五九五四]、カムイハヨクベ「神の鎧」を「カムイ《神》は、この場合《立派な》ことを表す」[田村、一九九一 二二]などがある。

ただし、それぞれの語の意味・説明としてはこのとおりであっても、英雄叙事詩における「カムイ」という語がすべてこうした意味合いなのか、その使い方としてのまとまった説明はない。また、①と②との相違である「神」であることを含意するか否かの解釈が恣意的であるようにも見受けられるため、ここに挙げた語が必ずしも①②に峻別できるわけではないだろう。むしろ、「カムイ」という語は、「神のように」という意味を含意するか否かを問わず、「素晴らしい」「立派だ」という意味になる語だと捉えるのが適当であろう。

## 5. 2. 鍋沢氏のテキストにおける「カムイ」という語の使い方

次に、鍋沢氏のテキストにおける、「カムイ」という語の用法をまとめると、およそ以下のように分類できる。

### (1) 神そのものを表す

神そのものを指示する場合や神から授かった呪具など、直接神に関係するために「カムイ」という語が使われている場合も当然のことながら少なくない。たとえば、カムイマウ「神風」は、ただの風ではなく、主人公をはじめとする勇者たちが空を飛んで移動する際や、主人公らの憑き神が引き起こす風に対してのみ使われる。そのため、単に「すばらしい風」ではなく、「神（憑神）が起こす風」である。また、カムイロルンペ「神の

戦い」は、主人公たち人間（勇者）同士の戦いに対して、憑き神同士の戦いを指す場合に使われることがあり、この場合は、実際に神同士の戦いを意味する。このほか、カムイモシリ「神の国」は、神が住んでいる天上世界で、アイヌモシリ「人間の国」に対して使われる。また、カムイクスリ「神の薬」は、これを塗ることで化け物の放つ「毒の匂いの風」から身を守れるという呪具で、神から授けられる。そのため、単に「すばらしい」という以上に、「神から授かった」を含意すると解釈できる。同様に、神から授かったものに対して使われる例としては、カムイランケタム「神下しの刀」などがある。

### (2) 美称（神のごとき十神を含意しない）

先行文献において主に指摘されている使い方である。「神そのもの」を指示するというよりも、もう少し広い意味であり、「神のごとき」素晴らしさを表す場合や、単に「素晴らしい」「立派な」の意味にあたり、美称や讚美を意味する修飾語としての使い方である。ここでは、「神のごとき」という意味を含むか否かに拘らず、ともに美称であるということから同じカテゴリーとして扱う。

この用法の例としては、カムイラメトク「神の勇者」やカムイネアンクル「神なる人」といった、主人公やその他の勇者（味方・敵対者を問わず）に対して使われる呼称がある。いずれも人間の範疇の登場人物なので、ここでの「カムイ」は神そのもの

のを表すというより「神のように立派な」あるいは単に「立派な（勇者）」の意味である。同様に呼称としては、カムイアアキ「神の我が弟」などのように、親族名称を使う場合がある。親族名称の前に「カムイ」をつけているが、こちらも主人公やその親族、ヒロインについて言われる。そのため、この「カムイ」も神の一族という意味ではなく、「立派な」「素晴らしい」の意味である。

人物以外にも、カムイコソソテ「神の小袖」、カムイチパヌブ「神の鉢巻」のように、主人公やヒロインをはじめとする勇者たちの装束について、「カムイ」という語によってその立派さを言う例も多い。

ただし、このような「カムイ」+名詞という形式の語句のなかには、「立派な」と解釈することもできるが、その意味が薄いかあるいは含有しないと解釈できることも可能な用例もある。

たとえば、カムイオトブ（カムイオトビ）「神の髪」という表現がある。これは主に主人公の実兄であるカムイオトブシが初登場する際の描写において「美しい髪」という意味で用いられる。だがそれ以外には、戦闘場面において敵対者の髪をつかんで首の骨を折って殺す、という場合にも使われる。後者の場合は、髪的美しさを讃えるような文脈ではないことから、「立派な」を含意しているとは考えにくい。

この場合は、美称・尊称としての「カムイ」というよりも、アイヌ英雄叙事詩における、一行を四ないし五音節にするとい

う韻律の規則に合わせるための適当な修飾語として「カムイ」が選択されていると考えられる。

したがって、連体修飾語として使われる「カムイ」は、本来の「神そのもの」を表す場合もあるが、そこから「神のように（立派な）」、さらには「（神に限らず）立派な」と意味範囲が広がっていった。さらにそこから「（立派に限らず）主に音節数合わせのために使われる語」という、ほとんど「神」の意味が消えている用法まであり、英雄叙事詩における「カムイ」は単に神のみならず、幅広い使われ方をしているとまとめることができる。

### (3)（人間と対比して）「人間以上」の意味

前述のように、登場人物のうち、人間の国に住む勇者は神ではない。しかし、人間でありながら人間以上であるという意味で「カムイ」という語を含む表現が修飾句として人間（勇者）に対して使われることがある。これは主に戦いにおける力や美しさについて、普通の存在としての人間との対比から、人間以上の存在すなわち神のようだと讃える表現である。たとえば、カムイロロンベ「神（同士）の（ような）戦い」といった語句がある。これは「神同士」（憑き神同士）の戦いを指示することもある語句だが、主人公たち人間の勇者同士での戦いをカムイロロンベということもある。この場合には「（神同士の戦いのように）激しい戦い」という意味として使われている。



また、カムイヘタプネ「神であるのか」という語句は、人間である勇者に対して、並の人間以上に見えるということから、カムイヘタプネ／アイヌヘタプネ「神であるのか、人間であるのか」もわからないほど素晴らしいという意味で使われる。「水なしに育つ」三六一—三六二「行など」。このように、カムイヘタプネ「神であるのか」だけではなくアイヌヘタプネが対で用いられることも多い。主人公に使われることが多いが、敵対者など主人公以外の勇者にも使われる。

#### (4) 不定の登場人物

人間に対して「カムイ」という語が使えるのは、ここまでに見たような、誇張や比喩も含めた「神のような」を意図する修飾語としてである。しかし、以下の用法のみ、修飾語として使われないにもかかわらず、人間のことを「カムイ」という名詞であらわすことがある。

たとえば、「私に何の神が憑いているのかわからないが」というフレーズにおける「何の神（ネプカムイエ）」のように、憑き神など、神と確定してはいるが正体不明の登場人物を指して「カムイ」という。だが、主人公や勇者などの人間が対象であつても「どの人が住んでいるところだろうか」のように不定の人物を言う場合には、ネプカムイエ「何の神」（対句の場合はネプカムイエ／ネプピトホ「何の神／何の尊」という表現を用いる。<sup>8)</sup>

登場人物が不定である際にネプアイヌフ「何の人間」という

語句を用いているのは一例のみ（「クトゥネシリカ」四四一—七行目）で、何者であるか、その正体が不明な時点では、その人物が神であるか人間であるかを問わず、ネプカムイエ「何の神」という語句が用いられている。

#### 6. 「アイヌ」という語の使い方<sup>9)</sup>

一方、アイヌ「人間」という語が使われる場合は、以下のようなものがある。

##### (1) 人間そのものをあらわす

「カムイ」が神そのものを指示することがあるように「アイヌ」も人間そのものを指示することも少なくない。

たとえば、アイヌモシリ「人間の国」は、カムイモシリ「神の国」に対して、人間が住む地上世界のことである。

また、アイヌアクポ「人間の弟」のように「アイヌ」＋親族名称という呼称の表現もある。たとえば天の国にいる人文神が主人公を指して言う場合に、神（である発言者）に対して、主人公が「人間」であることを明確にするための修飾語となつている。そのため、カムイアアキ「神の弟」のように「カムイ」においても同じ形式の語句は見られるが、修飾語＋親族名称という同じ形式ではあつても、「カムイ」の場合は神とは関係なく美称としての用法だが、「アイヌ」の場合は美称ではなく人間で

あることそのものを言っており、パラレルな関係にはなっていない。

## (2) 美称

「カムイ」には美称としての用法が多いことは前述の通りだが、「アイヌ」を用いた表現のなかには、「カムイ」と同様に美称として用いられる場合もある。ただし、表現としては固定しており、アイヌピト「立派な人」、ボンアイヌボンクル(ポナイヌボンクル)「年若い勇士」に限られる。いずれも主人公に用いられる例が多いが、敵対者も含め主人公以外の勇者に対しても使われる。

## (3) (神と対比して)「人間以上」の意味

前述のカムイヘタブ／アイヌヘタブ「神なのか／人間なのか」のように「カムイ」と対で用いられ、人間か神かわからない、すなわち人間ではなく神のように思えるほど立派だという意味を表す際にも「アイヌ」という語が用いられることがある。なお、この場合は、「アイヌ」という語そのものが立派であることを表すのではなく、「カムイ」との対句という意味合いが強い。

以上は「カムイ」の使い方と同様の、あるいは対応する用法である。このほかに「カムイ」にはない使い方として、以下のようなものが見られる。

## (4) 身体性

特に戦闘において、人間の首を斬る、復活時に人の身体が形成されていくなどのように、登場人物の身体性や姿に着目する場合には「アイヌ」という語が使われ、「カムイ」は用いられない。

たとえば、アイヌペンニシ「人間の上位」、サパサクアイヌ「頭のない人間」という表現は、主人公が刀を振るって敵の身体をバラバラにする際にしばしば見られる。

また、アイヌカツネ「人間の姿として」は、自分の周りに巫力の霧を張って、自分の正体を隠そうとしている人物のことを「人の姿に見ることができない」「トリカブト姫」八「八行目」と言う場合などに使われる。この場合も、「アイヌ」という語のみが用いられ、「カムイ」が用いられる例はない。

## (5) 蔑称

主人公や敵対者を罵る際に用いられる語で、主に登場人物による会話文中で用いられる。これは、ウエンアイヌサニ(ウエナイヌサニ)「悪い人間の子孫」という表現にほぼ限られる。これは、特に相手を罵倒する際に使われるが、兄弟間で言われる例もあることから、実際に誰のサニ「子孫」であるかは関係なく、ひとつの常套的な表現である。

## 7. 結論——登場場面における「カムイ」と「アイヌ」の使い分け

以上のような、「カムイ」「アイヌ」という語のそれぞれの使い方から、登場場面において、同一人物であっても空を飛んでくる際には「カムイ」、地上に降りる際には「アイヌ」が用いられている理由として、次のようなことが考えられる。

空を飛んでくる際には、カムイオマニシ「神入りの雲」を伴うと語られるように、まだ遠くにいるうえ、雲などによってその姿を確認することができないため、人間であるはずの登場人物に対しても「不定の人物」としての「カムイ」が用いられている。

一方、地上に降りる際は、どのような人物がやって来たのかが、ややわかってくる段階であるため、人間である場合には「カムイ」は使われなくなる。主人公はその正体を直接目視してはいないため、人物の特定はできていないものの、「刀の鏗の音」がしていることから男である（あるいは、首飾りの音から女である）ことがわかる。そして、その不定の人物が実は神ではなかったというものをアイヌテレケ「人間が跳び下りる」という表現によって、示しているのではないだろうか。<sup>10</sup>

同様の使い分けは、登場場面以外でも見られる。たとえば、女主人公が神の国から人間の国を見下ろしていると、ネブカ

ムイ／ネブピトホ「何の神／何の尊」かわからないが、誰か巫術でもって霧を作っている人物の存在が目に残まる。この際は、霧によって正体がわからないことから、不定の人物をネブカムイ「何の神」と呼んでいる。そして後に主人公が霧の中身となる人物の姿を確認した際には、アムセツカタ／アイヌホツケコトム「寝台の上に／人が寝ているように」「トリカブト姫」四一九四二〇行」と、同一人物を指示する語が「カムイ」から「アイヌ」へと変わっている。この場合は、人物の不定性のみならず、人の姿・格好であることが確認できたという身体性によって「カムイ」から「アイヌ」という語へ移行しているという側面もあるだろう。

したがって、人間である勇者たちが雲や霧などをまとって姿が確認できない段階では、並の人間以上の力を持った「不定の人物」であることを「カムイ」という語であらわすが、その雲や霧が晴れ、人物の固有名などが特定できないまでも、おおよその正体があらわになった段階では、その人物自体は神ではなく人間であるということや、身体性の現れから「アイヌ」という語を用いているという使い分けによるものだと考える。<sup>11</sup>

さらに、この登場場面より後には、登場人物がどこから来た何者であるかが特定されることから、ウンクル「ウの人」、ウンマツ「ウの女」などの名称や、コットウレシ「ウの妹」などの関係性を示す語句などによって登場人物は呼ばれ、「カムイ」「アイヌ」という呼称は使われなくなる。登場場面に限って

「カムイ」「アイヌ」が用いられるのも、人物が不定であるというところが関わるのであろう。

ただし、以上で見たような違いは、アイヌ英雄叙事詩すべてに共通するわけではない。たとえば、幌別の金成マツ氏によるテキストでは、登場場面において人物が地上に降り立つ際に、

ヤクラカウン

槽の上から

カムイラフム

神の飛び降る音があり

という表現が多く見られる。これまで見てきたように、鍋沢氏のテキストにおいてはアイヌテレケ「人間が飛び降りる」という表現がよく使われる部分において「カムイ」という語が用いられている。同じ金成マツ氏によるテキストの注釈において、このような場合の「kamui (神) は招待されて来る英雄たちのことを尊敬していいたる語、と伝承者の自註」〔金田一、一九九三 b 三七七〕とあることから、金成氏のテキストにおいては、「英雄達のことを尊敬して」いうことに着目しているために「カムイ」を用いていることが伺える。このように伝承者によって表現における相違もあるが、鍋沢氏のテキストに見られる表現としては、以上のような使い分けが確認できる。

### テキスト・参考文献

遠藤志保「アイヌ英雄叙事詩における登場人物の名称」『千葉大学人文社会科学研究所プロジェクト報告書 アイヌ語

の文献学的研究(二)』二〇一四 千葉大学人文社会科学研究所

大島建彦、藪田稔、圭室文雄、山本節(編)『日本の神仏の辞典』二〇〇一 大修館書店

奥田統己「アイヌ語の韻文における音節数志向とアクセント志向」『千葉大学ユーラシア言語文化論集 一四』二〇一二 千葉大学ユーラシア言語文化論講座

金成マツ(筆録)、金田一京助(訳注)『アイヌ叙事詩 ユーカラ集I』一九五九 三省堂

金成マツ(筆録)、金田一京助(訳注)『アイヌ叙事詩 ユーカラ集V』一九六五 三省堂

金田一京助『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』一九三一 東洋文庫

(引用は金田一京助『金田一京助全集 第九卷』一九九三 a 三省堂

金田一京助『金田一京助全集 第一〇卷』一九九三 b 三省堂)

金田一京助『金田一京助全集 第一二卷』一九九三 c 三省堂  
久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』一九七七 岩波書店

久保寺逸彦(編)『アイヌ語・日本語辞典稿』一九九二 北海道教育委員会

田村すず子『アイヌ語音声資料七』一九九一 早稲田大学語学

教育研究所

藤村久和『アイヌの霊の世界』一九八二 小学館創造選書

北海道教育庁社会教育部文化課(編)『アイヌ民俗文化財ユーカラシリーズ―金の下駄(カニピラッカ)』一九七九 北海道教育委員会

道教育委員会

N・G・マンロー(著)、B・Z・セリグマン(編)『アイヌの信仰とその儀式』二〇〇二 国書刊行会

門別町郷土史研究会(編)、鍋沢元蔵(筆録)、扇谷昌康(訳注)

『アイヌ叙事詩 クドネシリカ』一九六五 門別町郷土史研究会

会

門別町郷土史研究会(編)、鍋沢元蔵(筆録)、扇谷昌康(訳注)

『アイヌの叙事詩』一九六九 門別町郷土史研究会

附記

本論文は、二〇一四年六月八日に東北大学にて行われた第三八回日本口承文芸学会大会における発表「アイヌ英雄叙事詩におけるkamuy(カムイ)について」を改題のうえ、加筆・修正を行ったものである。論文としてまとめるにあたっては、発表に際して頂戴した質問・意見を参考にした。ご指導くださった諸先生方に御礼申し上げる。

注

(1) テキストの引用におけるアイヌ語はローマ字表記だが、本稿においてはすべてカナ表記に改めた。テキストにおいて

は、以下同様。ただし論文などからの引用は、ローマ字も含めてそのまま表記している。

(2) 空を飛んで近づく際にカムイではなくアイヌエクフム「人間が来る音」という表現が使われる例は二例のみ(クトウネシリカ「五一八四行、六二四四行」)で、それ以外は上述の使い分けに則っている。

(3) 以後、テキストにおける字句としてのカムイには「」をつけ、雷の神など登場人物にかんしては「神」という日本語訳で記す。「アイヌ」「人間」の使い分けについても、同様。

(4) 国立民族学博物館所蔵鍋沢元蔵筆録ノートのテキストは二〇一四年九月現在未公開(国立民族学博物館より刊行予定)。各タイトルのうち、「ポイヤウンマツ」は昭和三四年筆録ノートに所収。鍋沢氏によるタイトルは「ポイヤウンマツ イワンロクンテウ ウコエタイエ(ポイヤウンマツが六隻の戦艦と引つ張り合う)」だが、略して「ポイヤウンマツ」と記す。「三兄弟」は昭和三年筆録ノートに所収。タイトルは書かれていないため、筆者が便宜的につけた。「ニタイパカイエ」は筆録年の違いによって、仮に「二九年版」「四〇年版」(共に昭和)とした。

(5) 狩猟の神など、全体を統括する神も存在するが、ここでは概観にとどめるため詳細は割愛した。

(6) フリは神というより化物に近い存在だが、神謡(たとえ

ば久保寺一九七七)にも登場し、「これを守護神と仰ぐ一族がある」(久保寺 一九九二 九三)ことから祈りの対象ともなっている。

(7) 他の地域あるいは伝承者による英雄叙事詩のなかには、主人公である少年英雄の母親が天の国のオオカミ神の妹である「たとえば北海道教育庁社会教育部文化課一九七九」ように、単なる人間ではなく神に近い存在として語られることも少なくない。しかし、鍋沢氏のテキストにおいては神との関係性はほとんど語られず、主人公についても人間としての側面が際立っている。英雄叙事詩の主人公の性質は必ずしも一様ではなく、地域によって違いもあるため、主人公の神性／人間性についても議論を深めるべき重要なテーマのひとつではあるが、紙幅の都合から別稿に譲る。

(8) ネッピトホの「ピト(ホ)」は日本語「ひと」が語源ではあるが、「カムイ」との対句において使われる語であることから、「カムイ」と同意の語である。すなわち指示するのは「人間」ではなく「神(カムイ)」。

(9) 「アイヌ」という語には「人間」のほか「父親」という意味もあるため、アコロアイヌ「我が父親」のような使い方があるが、ここでは「人間」の意味で使われる語に限って挙げてみる。

(10) なお、やってくる登場人物が神である場合は、カムイエク

「神が来る」そしてカムイテレケ「神が跳び下りる」(「ニタイバカイエ(二九年版)」)という表現が使われており、この場合もテレケ「跳び下りる」という動作のところ、神か人間かが明示されている。

(11) ここで考察した語の意味の違い以外にも、「カムイ」は第二音節にアクセントがあり、「アイヌ」は第一音節にアクセントがあるという違いもあるため、奥田(二〇一二)で説明されているように、アクセント優先と音節数優先による韻律による影響によって使い分けられている可能性も考えられる。

(12) 「カムイ」「アイヌ」以外の登場人物の呼称については、遠藤(二〇一四)で論じている。

(えんどう・しほ／千葉大学大学院)